

静嘉堂創設 130 周年・新美術館開館記念展Ⅱ  
はつはる  
「初春を祝う—七福うさぎがやってくる！」  
2023 年 1 月 2 日(月・振休)～2 月 4 日(土)

2022 年 10 月に展示ギャラリーを東京・丸の内の重要文化財「明治生命館」(昭和9年<1934>竣工。東京都千代田区)の 1 階に移転し、開館した「静嘉堂@丸の内」。2023 年 1 月 2 日(月・振休)から 2 月 4 日(土)まで、静嘉堂創設 130 周年・新美術館開館記念展Ⅱ「初春を祝う—七福うさぎがやってくる！」を開催します。

福をはこぶ七福神と童子たち、兎の冠を戴く総勢 58 体の御所人形の一大群像は、卯年生まれの岩崎小彌太(三菱第 4 代社長、1879～1945)の還暦を祝って、夫人孝子が京都の人形司・丸平大木人形店の五世大木平藏(1886～1941)に制作させたものです。衣装や持ち物、乗り物など、すべてが木彫彩色で精巧に仕上げられた本作は、昭和 14 年(1939)8 月、東京麻布の鳥居坂本邸における還暦祝賀会で披露されました。笑みをたたえた人形たちは、それぞれ小彌太と夫人の姿を写したともいわれる布袋と弁天など七福神を中心に、鯛車を曳き、楽器を奏で、あるいは餅をついて、寿ぎの宴をくりひろげています。

「静嘉堂@丸の内」が開館して初めての春を迎える令和 5 年は、小彌太の還暦から 7 回りした卯年にあたります。その記念として祝賀の人形たちを展示するとともに、中国・日本の寿ぎの絵画、新春にふさわしい宴の器まで、吉祥性にあふれる作品を一挙公開。新たな人生の船出を祝う御所人形の行列とめでた尽くしの絵画・工芸品とで、東京丸の内で迎える初めての正月を祝います。

【開催概要】

- 会 期：2023 年 1 月 2 日(月・振休)～2 月 4 日(土) <5 週間 30 日開催>
- 会 場：静嘉堂@丸の内(明治生命館 1 階)  
〒100-0005 東京都千代田区丸の内 2-1-1 明治生命館 1 階
- 休 館 日：毎週月曜日(ただし 1 月 2 日・9 日は開館)、1 月 10 日(火)
- 開館時間：午前 10 時～午後 5 時(金曜は午後 6 時まで)  
※入館は閉館の 30 分前まで
- 入 館 料：一般 1,500 円 大高生 1,000 円 中学生以下無料
- 問い合わせ：TEL 050-5541-8600(ハローダイヤル)
- ホームページ：<https://www.seikado.or.jp>
- twitter：@seikadomuseum
- 主 催：静嘉堂文庫美術館(公益財団法人静嘉堂)



## 【本展の見どころ】

### 1. 総数 58 体！昭和の名工による圧巻の御所人形たち

兎の冠をつけた七福神たちの「宝船曳<sup>たからぶねひき</sup>」と「輿行列<sup>こしぎょうれつ</sup>」を中心に、「鯛車曳」「楽隊」「餅つき」の 5 つのグループによって構成される総数 58 体もの御所人形がずらり一列に並びます。人形たちの愛らしいしぐさや表情をお楽しみください。

### 2. 初春に縁起良し!!日本・中国のめでたい絵画がたっぷり

静嘉堂を代表する中国・明清時代の絵画から、江戸後期の大雅・蕪村・抱一、近代日本画の巨匠、大観・印象まで、東洋伝統の吉祥画題を選びすぎり！

### 3. 宝尽くしのうつわで祝う正月

正月にふさわしい吉祥デザインの茶道具や懐石のうつわ、宴席の道具など、まさに宝尽くし！！



広報画像 1 五世大木平蔵《木彫彩色御所人形》のうち「宝船曳」

## <展示構成と主な出品作品のご紹介>

静嘉堂@丸の内はホワイエを中心に 4 つの展示ギャラリーがあります。

### Gallery 1 新春・日の出

横山大観《日之出》昭和時代・20 世紀

辺り一面、雲海が広がる中、山々が頭を出す。遠景に真っ赤な太陽が昇り、雲は金色に輝く。富士山頂でのご来光を拝むような心地のする一幅。横山大観(1868～1958)は日本画革新運動の中心となって活躍、朦朧体<sup>もうろうたい</sup>と呼ばれる手法で空気をも描いた。



広報画像 2 横山大観《日之出》

## Gallery 2 七福うさぎがやってきた—小彌太還暦の祝い

五世大木平藏《木彫彩色御所人形》のうち「宝船曳」・「輿行列」 昭和 14 年(1939)

財宝を満載した車輪付きの宝船に、金色の兎形の冠を戴く布袋が坐している。本作は、岩崎小彌太の還暦を祝って、夫人孝子が京の人形司・丸平大木人形店の五世大木平藏に製作させた御所人形の一大群像の主要部分に当たる。群像は、中国風の唐子たちが曳く七福神の宝船を中心に、楽隊や輿行列、和装の童子らが曳く鯛車、餅つきなど、総数 58 点のめでた尽くしの人形からなる。

全ての人形が戴く兎形の冠は、明治 12 年(1879)己卯生まれの小彌太の干支に因むもの。岩崎家の家紋「隅切り角に重ね三階菱」が描かれた宝船の帆は、追い風を受けて大きく張っている。財宝を満載した船上には、布袋が坐して唐団扇をふるい、恵比寿・大国・毘沙門天が唐子たちを鼓舞している。船首に表された、前肢を揃えて跳ねるような兎の姿は、繁栄と飛躍の象徴である波兎<sup>なみうさぎ</sup>をイメージしたものだろう。

宝船に続く輿の行列は、鶴を連れた寿老人と福祿寿に先導され、輿上には弁財天が座る。



広報画像 3・4 五世大木平藏《木彫彩色御所人形》のうち「宝船曳」(上)・「輿行列」(下)

香取秀真《群兎文姥口釜》昭和 14 年(1939)

小彌太の還暦祝として贈るため、ケンブリッジ大学留学時代の後輩で新潟出身の実業家・西脇済三郎<sup>にしわきさいざぶろう</sup>(1880~1962)が、当時金工界の重鎮で帝室技藝員<sup>かとりほつま</sup>の香取秀真(1878~1954)に制作を依頼した茶釜。箱蓋裏には「昭和己卯立春依嘱秀真作」と書かれ、「帝室技藝員」の印が捺される。本作の群兎図は、京都嵯峨・大覚寺正寝殿腰障子に描かれた渡辺始興筆「野兎図」に取材したもの。やわらかい搗き立ての餅のような釜の姿に、兎にちなむ杵形<sup>きね</sup>の鰻<sup>かんづき</sup>付がつく。「秀真」の銘が、片方の鰻付下方にある。金・銀星文を象嵌した丸鰻が付属する。



広報画像 5 香取秀真《群兎文姥口釜》



### Gallery 3 うさぎと新春の美術

李士達《歳朝題詩図》明時代・万暦 43 年(1615)【左;広報画像 6】

白梅が香る寒い正月。火鉢にあたりながら正月試筆として詩を揮毫する人、お屠蘇を楽しむ人が描かれる。門をくぐる老人にも気が付かず、子供たちは爆竹に夢中。李士達は明末蘇州派の画家。

沈南蘋《梅花双兔図》清時代・雍正 9 年(1731)【中央;広報画像 7】

白梅(長寿)の根元に二羽の白兔(不老不死/多産)、上部の枝にシロガシラ(夫婦長寿)の <sup>つがい</sup> 番がとまる。太湖石、薔薇、靈芝はじめ、全てがお目出たい夫婦そろっての長寿への願いが込められた一幅である。

池大雅《寿老図》江戸時代・18 世紀【右;広報画像 8】

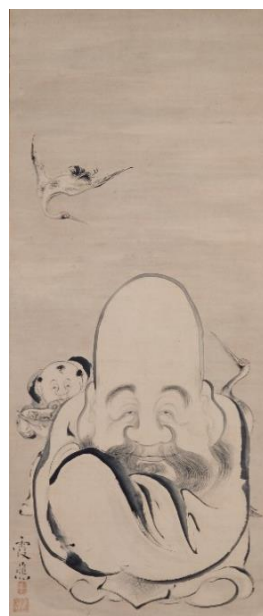
南画の大成者・池大雅のインパクト抜群の寿老人。背後には、寿老人の供である鶴が飛ぶ鶴と呼応し、靈芝を持った童子がのぞいている。ダイナミックな筆さばきも見どころである。



広報画像 6



広報画像 7



広報画像 8

《南天蒔絵提重》江戸時代・18～19 世紀

縁起物の南天を <sup>たかまきえ</sup> 高蒔絵や切金であらわした提重。外枠は、天板に蔦葉形銀製座金の提げ手、腰板に木瓜を透かして底に刳形の四足をつけ、内側上部に仕切り付きの棚板、下部に酒器台を設けている。枠内には、入角の四段重・刳形四足付きの入角盆・蒔絵盃・入角長方形箱・刳形足付の長方形皿 5 枚・蔦唐草彫の銀徳利一対を納めており、銀徳利の極めて細緻な彫り文様が魅力となっている。



広報画像 9《南天蒔絵提重》(左)収納状態、(右)重や徳利、皿等を展開した状態

樂慶入《赤樂宝尽寄向付》江戸時代・文久4年(1864)

樂家11代慶入(1817~1902)による丁字・分銅・小槌・七宝・宝珠というめでたい宝をかたどった向付。それぞれ見込に白泥で砂金・袋・笠・ねずみと巻物・蓑・鍵といった宝尽し文様を描いている。また小さな三足を付けた底部に「文久四／甲／初造」、「甲子年／初竈」など、文久4年(1864)正月の初竈において焼造したことを示す釘彫りの銘があり、意匠もあわせてめでたさにあふれた作品である。全ての底部に「樂」印(董其昌印)が捺されている。



広報画像 10 樂慶入《赤樂宝尽寄向付》

永楽和全《金欄手雲龍文銚子》江戸～明治時代・19世紀

和全(1823~96)は永楽善五郎家の12代で、祥瑞・金欄手などの唐物茶陶の写しに才能を発揮した。茶の湯の酒器として唐物の金欄手はとくに人気が高いが、和全は本作に得意の金欄手の手法で中国風の意匠を描き込んでいる。この器形は懷石の酒器として姥口の爛鍋を意識したものだろう。艶麗な赤地に金泥を用いて、胴部に火焰宝珠を追って寿山福海の上を飛翔する双龍を、丈高に作られた提げ手には蝶や花唐草を描き、細部は針描きであらわしている。



広報画像 11 永楽和全《金欄手雲龍文銚子》

《猩々蒔絵三つ組盃》江戸時代・18~19世紀

三つ重ねの平盃は、平安時代の宮中儀礼にはじまり、武家社会のなかで定型化した「式三献」(三々九度の盃事)の形式を伝えるもの。大中小三枚の盃に、<sup>しょうじょう</sup>猩々・正月飾り・梅の古木を蒔絵や漆絵であらわしている。猩々は、中国の架空の動物で、人間のような顔や足を持ち、人の言葉を解し、酒を好むという。能の演目に表現された、赤く長い髪の酒好きの精霊として描かれている。



広報画像 12 《猩々蒔絵三つ組盃》

#### Gallery 4 七福神と初夢

酒井抱一《絵手鑑》全72図のうち「富士山」江戸時代・19世紀

酒井抱一(1761~1828)は、姫路藩主の次男として生まれ、尾形光琳の画風を継承し江戸で新たな展開をみせた江戸琳派を代表する画家。

全72図が画帖の表裏に貼りこまれた本作は、抱一が光琳のみならず、狩野派・土佐派・円山四条派・中国画など幅広い画技を習得していたことを示す貴重な作品。本図はその一図で、純白の富士にたなびく金雲、深い紺青の背景に鮮やかな朱色の朝日といった装飾性あふれる富士山の図として、とくに知られる優品。



広報画像 13 酒井抱一《絵手鑑》のうち「富士山」

鈴木春信《七福神遊興》江戸時代・宝暦年間(1751～64)末頃

正月二日、枕の下に宝船に乗る七福神の絵を敷くと吉夢が見られるという。本作は歌舞音曲に興じる七福神と、梅・松を描いた正月用の摺物。<sup>あま</sup>「天の岩戸ひらくや花の恵天楽」とあり、本図は天照大御神が天の岩戸に籠った折に、天照大御神の気をひこうと岩戸の前で神々が催した宴に見立てられており、円窓の障子は半分まで開いている。大判紅摺絵の名品。



広報画像 14 鈴木春信《七福神遊興》

国宝《曜変天目(稲葉天目)》建窯 南宋時代・12～13 世紀

曜変天目は、喫茶専用の黒釉碗のうち、内面に浮かぶ大小の斑文の周囲に、青色や虹色に輝く光彩が現れたものをいう。完全な形のものは日本に現存する3点のみ。本作は徳川将軍家より3代将軍家光の乳母・春日局の手を経て、淀藩主稲葉家に伝来した。

家光は春日局が病に伏せたとき、その平癒を願って、この《曜変天目》で薬湯を飲ませようとしたと伝わる。曜変の不思議な輝きに、病からの回復と健康の願いが込められたのだろう。



広報画像 15 国宝《曜変天目(稲葉天目)》

## 次回展覧会:

静嘉堂創設130周年・新美術館開館記念展Ⅲ お雛さま—岩崎小彌太郎へようこそ  
2023年2月18日(土)～3月26日(日)



### 【報道に関するお問い合わせは】

◆静嘉堂文庫美術館 広報事務局(共同PR内 担当:三井)

※在宅勤務も増えているため、メールでいただくと助かります。

E-mail: seikado-pr@kyodo-pr.co.jp / TEL. 03-6264-2382

〒104-0045 東京都中央区築地 1-13-1 銀座松竹スクエア 10F

◆静嘉堂文庫美術館 E-mail: press@seikado.or.jp TEL. 080-1708-7717(広報担当:大森)